

実践報告

コロナ禍における急性期・周術期看護論実習の取り組みと今後の展望

田村 葉子*・田口 豊恵*

I. はじめに

2020年度、新型コロナウイルス感染症の感染拡大により看護基礎教育の臨地実習においても大きな影響を受けた（一般社団法人日本看護系大学協議会, 2020）。本学の急性期・周術期看護論実習を実施するにあたり、本学の「看護学実習に関する感染症拡大予防のためのガイドライン」に則り実施した。実施にあたっては、学生に臨地実習の機会を平等に提供するために、実習方法、実習期間の見直しを行った。本稿では、主に以下の2点について述べる。

1) 対象理解を目的とし、実習前導入学修期間に、動画を活用した看護過程を展開した。

2) 通常8日間の臨地実習を3日間に短縮した。その後の学内実習を1日から2日間とし、看護計画の共有を行った。

II. コロナ禍における急性期・周術期看護論実習の取り組み

近年の医療の高度化に伴う在院日数の短縮化、さらにコロナ禍で実習期間を短縮せざるを得ない状況下で、学生は、短期間で対象を理解し看護過程を展開する必要がある。そこで、まず、実習前導入学修期間に、「動画を活用した模擬患者」で看護過程を展開し、臨地実習に備えた。模擬患者の事例にはコロナ禍の臨地実習で捉え

ることが難しい「家族との面談場面」と「術後1日目の離床場面」を取り入れた。その結果、学生は「紙面の模擬患者であれば、情報が全て記載されているので情報収集しやすかったが、今回の実習前導入学修では、動画による模擬患者だったので、患者の言動・表情から情報を収集するのが難しかった」、「患者をアセスメントするためには、情報が不足していることに気づいた」等と述べている。「動画による模擬患者」で看護過程を展開することで、情報収集の難しさについて実感することができたが、対象理解には及ばなかった。阿部（2020）は「オンラインでも教材次第で現地と同じように学ぶことができる」と述べている。また、「今後の看護教員のあり方に関する検討会報告書」（厚生労働省, 2010）や本田ら（2019）においても、臨床と教育現場が連携・協働し、学生指導を行うことが示されている。これらのことから、臨床と教育現場が連携し、教材開発をすることの必要性が明らかとなった。

次に、3日間に短縮した臨地実習で何を学ばせるかを領域内で検討し、「早期離床場面」「術直後の観察場面」「術後1日目の観察場面」「術後ベッドの作成」に焦点を当て、実習が行えるよう臨地と調整を行った。その結果、学生は「早期離床の意義を実感できた」「術後1日目、2日目、3日目で患者の状態や観察項目が異なることがわかった」、「ドレーンからの排液の色を表現するのが難しかった」「予想していたよりも遙か

*京都看護大学

に患者の回復が早かった」、「疼痛が患者に与える影響の大きさを感じた」、「実際に手術当日になると生じる不安や恐怖があることがわかった」、「バイタルサインを測定し、術後合併症のリスクを踏まえてアセスメントし報告する場面が難しかった」、「痛みにより活動が減少されていた患者が、清拭を行い清潔のニードが満たされたことで表情や動きに変化が見られた」、と述べており、3日間の臨地実習でも臨地で経験すべき内容を厳選すれば、学びの多い実習になることが示唆された。

一方、臨地実習における看護技術は、殆どの項目で到達度が低下していた。これは、「急性期看護学実習では、刻一刻と変化する患者と患者を取り巻く状況を踏まえた看護実践が求められるため、学生の緊張や不安が強く、学内で演習した技術が提供できない」（中村ら，2015）と述べており、中村らの報告と同様に、3日間の臨地実習では学生の主体的な看護実践には至らなかったためだと考える。看護実践能力の向上には、シミュレーション教育が効果的であり、シミュレーション教育の有用性については様々な研究（Hayden JK, 2014；森安ら，2016；藤浪ら，2020）で検証されている。本学においても特に到達度の低かった技術項目については、高機能シミュレーターを用いて最終学年で補完する必要がある。

さらに、学内実習期間をあえて2日間に設定したことで、学生は、「看護計画には患者の個性を加えることで、患者に合った計画になることがわかった」、「退院支援は、患者の状態に加えて、発達段階や生活状況を考慮した内容にすることがわかった」、「他の学生の発表を通して、受持ち以外の看護計画や退院支援について知ることができた」と述べており、3日間の臨地実習で個々では経験できなかった内容についても、他の学生の学びを通して、学生間で共有できたのではないかと考える。北ら（2020）は、「臨地

での実習期間を長くすることが‘実習の充実’であると捉える発想を転換し、実習後の振り返りの時間を増すなど、短い期間で効果的に実習を行っていく方法を検討する必要がある」と述べており、本学においても、臨地での実習期間の検討が必要であると考えられる。

Ⅲ. 今後の展望

今回の実習方法、実習期間の見直しの評価については、学生の主観的な評価のみであり、十分に検証はできていないが、看護過程の展開については、教材を十分に検討できれば導入学修期間で補える可能性があること、3日間の臨地実習であっても経験すべき内容を厳選すれば効果的な実習になる可能性があることが示された。

文献

- 阿部幸恵．(2020)．コロナ禍で臨地実習の実施が制限されるなか、シミュレーション教育を生かした今後の実習のあり方とは．看護展望，45（10），1-5.
- 藤浪千種，氏原恵子，乾友紀，他．(2020)．急性期看護学実習におけるシミュレーション教育の展開．聖隷クリストファー大学看護学部紀要，28，21-28.
- Hayden JK, Smiley RA, Alexander M, et al. (2014). The NCSBN National Simulation Study: A Longitudinal, Randomized, Controlled Study
- Replacing Clinical Hours with Simulation in Prelicensure Nursing Education. *Journal of Nursing Regulation*, 5, Supplement, S2-S64.
- 本田可奈子，大澤伸治，大橋英治，他．(2019)．シミュレーション学習を活用した急性期看護学実習前学習の支援：臨床看護師との協働の試み．滋賀医科大学雑誌，32（2）．12-19.

- 一般社団法人日本看護系大学協議会．(2020)．
2020年度 COVID-19に伴う看護学実習への
影響調査結果（科目別）．2020年12月．
[https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/
uploads/2020/12/covid19_surveyBreport.pdf](https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2020/12/covid19_surveyBreport.pdf)
（閲覧日：2021年2月12日）
- 北素子，田中幸子，梶井文子，他．(2021)．実習の
長さを“充実”とする発想を転換し、短期間
でも効果的な学びを．日本看護協会機関誌，
73（1），74-78．
- 厚生労働省．(2010)．今後の看護教員のあり方に
関する検討会報告書．2010年2月17日．
[https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/
s0217-7b.pdf](https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0217-7b.pdf)．（閲覧日：2021年2月12日）
- 森安朋子，利木佐起子，趙崇来，他．(2016)．臨床
看護師、模擬患者との協同によるシミュレー
ション教育を取り入れた学内演習の効果 - 術
後1日目の看護 - ．佛教大学保健医療技術学
部論集，10，63-72．
- 中村裕美，神谷潤子，堀田由季佳，他．(2015)．急
性期看護学におけるシミュレーション教育
プログラムの作成．日本赤十字豊田看護大学
紀要，10（1），177-181．

